

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.5 日比谷公園

本記事はウェブ版オリジナルである。今回は日比谷公園という場所の観点から、セメント美術を考えてみよう。戦後はセメント彫刻を主体とする野外彫刻展の開催が盛んとなるからだ。1951（昭和26）年11月、白色セメントで作られた彫刻群が日比谷公園に展示された。この「秋の野外創作彫刻展」が日比谷公園における野外彫刻展の始まりである。この野外彫刻展は、名称・会場・テーマをその時々で変えながら、1973（昭和48）年まで続いた。第2回以降は開催時期が春へ変更となり、本野外彫刻展は春の到来を告げる恒例イベントとして人々のなかへ浸透していった（図1）。

主催は東京都、協賛は小野田セメント株式会社（現在の太平洋セメント株式会社）で、同社は彫刻の制作に必要なセメント2袋（100kg）と大理石粉石2袋を無償で彫刻家に提供し、制作場から会場までの運搬費までも負担した。これは小野田セメントによる芸術支援活動（メセナ）といえるだろう。不安定な材料供給や作品発表の場の少なさに頭を悩ます彫刻家にとって、この野外彫刻展は非常に喜ばしいものであった。

開催のきっかけは、東京都から小野田セメントへ対する提案であった。1950（昭和25）年、井の頭公園（東京都武蔵野市）を会場に戦後初の野外彫刻展が開催され、主催の日本彫刻家連盟の樽谷清太郎が懇意の関係にあった小野田セメントを東京都に紹介したのが機縁という。戦後の都市と公園の整備を画策していた東京都公園緑地部が小野田セメントを訪れ、野外彫刻展の開催を持ちかけたと伝わる。このとき設立された公園彫刻展委員会は、開催理由を次のように説明している。「従来セメントといへば、建築、道路、港湾、橋梁等いはば生命感のないもののみを造るものとばかり考へられてゐたものが、斯くも美しく純粋芸術の領域へも入り得て、人心を浄め都市や公園の風致美を助長せしめるものであることを知つて戴きたい念願であります」（『回顧七十年』小野田セメント株式会社、1952年）。戦争による人心の荒廃や都市美などの悩みを抱える東京都にとっても、野外彫刻展の開催は問題解決のひとつの糸口となるイベントであった。

また、昭和30年代半ばより小野田セメントにて野外彫刻展を担当した南壽敏夫氏によると、開催当初はいわゆる三白景気で、セメント・紙・砂糖の「白物」を扱う三業界は、空前の好景気を呈していたこともあり、白色セメントの品質を宣伝したい小野田セメントにとって、野外彫刻展は格好のアピールの場であったという。

小野田セメントは、中之島公園（大阪市）・生駒山頂（生駒市）・千里公園（吹田市）・水上公園（福岡市）など、日比谷公園以外の各地方でも野外彫刻展を開催した。その結果、セメント彫刻と野外彫刻展の存在が全国規模で浸透していった。

野外彫刻展に出品された作品は、小野田セメントが作家から買い上げて全国各地に寄贈する場合もしばしばあった。小野田セメントの寄贈によるセメント彫刻が都鄙を問わず全国各地に点在するのはこうした理由による。日比谷公園には、寄贈されたセメント彫刻の一部が残されており、野外彫刻展の名残を感じることができる（図2）。本作は中川為延（ためのぶ）が1963（昭和38）年の野外彫刻展に出品した作品で、台座には「豊穰 中川為延 作 寄贈 小野田セメント株式会社」と刻まれた金属プレートが設置されている。

小野田セメントと東京都が始めた野外彫刻展に刺激された各地の美術館や自治体が、同様の野外彫刻展を試み始め、1958（昭和33）年には神奈川県立近代美術館が「集団58野外彫刻展」を企画、1960年代には神戸須磨離宮公園現代彫刻展（兵庫県）や宇部市野外彫刻展（現在のUBEビエンナーレ、山口県）など、野外彫刻展の開催は全国的な展開をみせた。これらの展覧会では、出品作の素材もセメントに限らず、金属・木材・プラスチック・FRPなど多様化し、1990年代には野外彫刻展はパブリックアートという語句と密接に結び付き、彫刻を街づくりの一環として取り入れる自治体もみられた。

戦後の野外彫刻展の雛形は、日比谷公園の野外彫刻展にみることができよう。戦後の日本美術の一端をセメント業界が飾っている事実を改めてここに書き記しておきたい。



図1 野外彫刻展を鑑賞する来場者（1958／昭和33年）

写真提供：太平洋セメント株式会社



図2 中川為延《豊穣》（1963年）